

日本看護歴史学会
会報

日本看護歴史学会
第4号
1988年10月15日

— 歴史学会発展の礎 —
一〇〇年記念の大会開催される

山本捷子

去る八月二〇、二十一日、日本看護歴史学会第二回大会が、日本赤十字看護大学で開催されました。

今年は土曜日の午後からの開始という事もありまして、あらかじめプログラムを選んで参加された方も多く見受けられたようです。参加者は九十四名で、昨年より十数名も多く、去年の方々に加えて東京を中心とした新しいメンバーの参加が目立ちました。大会当日の入会者を含め、会員は二百名を越えました。本会へ寄せられる関心の深さと、看護歴史研究に情熱を傾ける向学心溢れる方々が益々増えることの喜びを強く感じ、心

から嬉しく思います。皆様の厚い御協力の賜物と深く感謝申し上げます。

プログラムは、初日は「近代看護婦発祥一〇〇年記念」の特別講演、研究報告と総会が行われました。特別講演は群馬県立女子大学の村田鈴子氏の「女子教育史の視点から看護教育を考える」でした。明治初期の学制から現代に至るまでの、女子教育の変遷の中で「看護」がどのように教育され、どんな位置づけがされてきたかをつぶさにお話し下さいました。小学校や女学校で「家政」の一部としての「生理衛生」が教授された経過

はありましたが、看護婦の養成については病院付属の教育が主流であったことから、村田先生の講演の所謂「教育史」の中に看護教育が登場するのは戦後の大学や高校衛生看護科としてであり、看護教育の置かれた立場を外側から見るこの大切さを私達に教えられたように思いました。

研究報告は二題。飯島美代子氏の「赤十字博物館と保健衛生活動」では赤十字博物館の存在と、それが保健衛生の普及に果たした役割について述べられました。吉川龍子氏は「高山盈の生涯」を研究した過程で、実際に高山盈とそのゆかりの深い人々の足跡をたどるといふ歴史研究・資料収集の仕方についての体験を話され、二題とも大きな示唆を得ることができました。

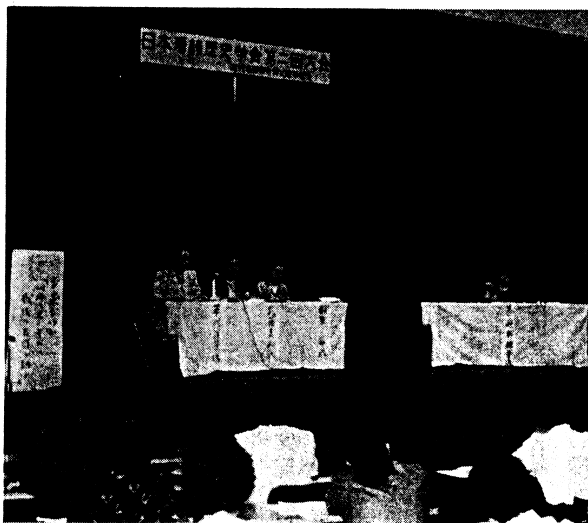
講演、研究報告ともに機関誌二号に掲載される予定です。

二日目は、午前中各分科会にわかれ、話題提供者を中心に熱心なグループ活動が行われました。この方式は自分のテーマをもって、どの分科会に所属するかを選択するために、多少の戸惑いはあったようですが、

去年の顔合わせから発展して、活発な討議がされました。大会の時間を契機に不断の研究活動が触発されますよう期待します。

午後は分科会の報告とシンポジウム「同時代史としての戦後の看護を語る」が行われました。

シンポジウムでは、都築公氏が「制度」の面から、特に昭和二十三年の保健婦助産婦看護婦法が身分法として確立した経過を、国会議事録の紹介をまじえながら話されました。「教育」の面からは、武藤美知氏が国立病院における看護教育を軸に、医療需要にこたえる教育の質の向上をはかり、学生の人権を獲得してきた看護教育の実



態の経緯が語られました。草刈淳子氏は行政・病院組織を含めた「管理」の変遷を健康政策や社会福祉・社会保障制度との関連から述べられました。

戦後四〇年の看護史を語るには内容が豊富過ぎて、九〇分という時間の短さを残念に思いながら、今後一つひとつの問題を掘り下げていくことに期待をかけて、閉会しました。

さて、今年「近代看護婦発祥一〇〇年」に当り、本会は設立一年日でしたが、記念のテレホンカード発売と「看護婦一〇〇年のあゆみ写真展」を企画しました。京都、東京、名古屋で開いた写真展はいずれも多くの方々の来場があり、関心の高さが感じられました。また、写真展を機にマスコミの方が「看護に関する問題」を取上げようという反響もあり、看護婦の歴史を知っていたらという所期の目的が達成されまして嬉しく思います。さらに近代看護婦の歴史一〇〇年と時を同じくした節目に本会が発足したことは意義深いことだという声も聞かれております。本会に寄せられる期待の大きさに責任の重さを痛感しながら、二年目の足元固めのために幹事一同努力したいと思っております。

第二回大会に参加して

金井 悦子

昨年誕生した新しい学会に興味をおぼえ会員ではないが参加する機会を得た。

村田鈴子先生の特別講演は広い女子教育史の視点から述べられ、私達は教育カリキュラムの発達の歴史を分析し、看護の本質をふまえて未来を含む過去を判断する必要があることを考えさせられた。過去を忘れた人間は、未来を持つことはできない”という先人のことば通りである!!

分科会は、25のテーマから自由に選んで参加できるという形式に、他にない新鮮さを感じた。村田先生の講演に触発され、「看護教育模範学院」に学んだ私は、自己をふり返る意味で、看護教育史に加わったが、話題提供者のみごとな導入で11名の参加者が自由に発言でき、時間の過ぎるのを忘れてしまふほど楽しかった。この分科会が、お互いを啓発し継続的に学習や研究を深めて、発展されることを心から応援したいと思う。

(非会員・日赤看護大学)

江崎フサ子

「当然、参加」、自分の意志で今年は臨んだ。わずか一年、見事な成長・発達をする乳児のように、メンバーの熱気は、高く、濃く育っていた。

時宜を得た講演・シンポジウム、会員による研究発表、身を乗り出して話し合った分科会。

面白かった、刺激された、感心した、学んだ、あせっちゃった。昨年、一回大会、誘われて京都にくっついて行った。亀山氏の講演にみた史実の発掘のあり方、資料に、カルチャーショック、ノックアウト。そして考えた、365日、自分が出来るかと。第二回大会はささやいた。「行動に移しなさい」。



第二回総会議事内容

詳細は別項に掲載しますが、第二回総会は氏家幸子幹事の司会のもとに以下の報告・審議がされました。

一、報告事項

1 事務局の動き(第一回総会以後本日まで) 山崎幹事

①現在会員数198名('87年度167名、'88年度 8月20日まで31名入会)

②幹事会は3回開催した。(11月7日、1月9日京都、5月29日東京にて)

③会報を3回発行した。(第1号12月15日、第2号3月15日、第3号6月30日)

④会誌第1号を3月15日に発行。

⑤会員名簿を3月15日に発行。

2 分科会報告 高橋幹事

二、承認事項

1 近代看護婦発祥百年記念行事について 亀山幹事

2 '87年度会計決算 福本幹事

3 会計監査報告

(会員) 江崎フサ子・岡崎寿美子

三、審議事項

1 '88年度活動方針・計画 亀山幹事

2 '88年度会計予算案 福本幹事

予算審議では分科会費四万円の具体的使途について質問があり、分科会活動推進のための連絡通信費や地方分科会の経費に当ると回答がされた。

各項目について出席会員全員の賛成により承認されました。

